

- ・ごあいさつ
- ・開館までの経緯
- ・イベント報告
- ・展示報告
- ・学芸員コラム
- ・学芸茶話



さかい利晶の杜 開設

平 成27年3月20日、堺市堺区宿院町西2丁に「さかい利晶の杜」は開設しました。「さかい利晶

の杜」は、民間の飲食施設（「スターバックスコーヒー」、「湯葉と豆腐の店 梅の花」と、博物館及び駐車場を備えた「堺市立歴史文化にぎわいプラザ」という公共施設をふくめた愛称であり、公募によって選ばれた名称を補作するかたちで名付けられました。

博物館は、戦国の世に天下一の茶の湯者と称された千利休と、近代に多彩な足跡を残した与謝野晶子という堺出身の偉人を顕彰する施設です。近隣には伝千利休屋敷跡、与謝野晶子生家跡もあって、それぞれゆかりの深い場所にあるといえます。

1階には堺市の観光周遊をサポートする観光案内展示室（無料ゾーン）と、千利休茶の湯館があります。また、三千家（表千家・裏千家・武者小路千家）にご協力いただき、椅子と机で気軽に抹茶とお菓子を楽しんでいただける立礼席での呈茶や、茶室（広間）でお点前体験ができる茶の湯体験施設も備わっています。2階には与謝野晶子記念館と、年に3、4回の企画展を開催する企画展示室、利休・晶子の関連書籍等を室内で自由に閲覧していただける図書情報コーナーが設けられています。

多くのお客様にお越しいただき、おかげさまで1周年を迎えました。今後も皆様に愛される施設をめざしてさまざまに取り組んでまいりますので、変わらぬご支援をいただきますよう、よろしくお願いたします。

▼「千利休茶の湯館」ができるまで

堺市は千利休のふるさとでありながら、長らく利休やお茶に関する施設がありませんでした。1995年、市立堺病院の移転に伴い、堺市芸術文化センター構想が策定され、世界のお茶を扱う施設が計画されましたが、その後利休顕彰の施設へとシフトチェンジし、現在の形をめざすことになりました。

すでに与謝野晶子文芸館という母体があった与謝野晶子記念館とは違い、千利休茶の湯館はゼロからのスタートです。利休ってどんな人？利休の生まれた堺って？どうしたら利休の目指した美を伝えられる？白熱した議論が続くなかで、構成やコーナータイトルが決まってきました。

第1コーナーは「千利休と堺」がテーマです。利休の茶の背景には、堺のまちの繁栄がありました。まずは中近世の堺をみなさまに知っていただきたいという思いで作りました。ここでは住吉祭礼図屏風という、堺のまちを描いた最も古い屏風を、6面のタッチパネルで紹介しています。また堺に関係のある人物を紹介するパートでは、音声案内を導入。千利

休の声は歌舞伎役者で堺親善大使の片岡愛之助さんが担当してくださいました。

第2コーナーは「千利休と茶の

湯」というテーマで、この館のメインともいえる部分です。堺の茶の湯で最も大事なキーワード、「市中の山居」。それをグラフィックで紐解きながら、利休の2つの茶室（床部分再現）が並ぶブースへ続きます。今市町屋敷と、聚楽第屋敷が左右に並んでいます。どこが違うのでしょうか？是非みなさまの目で確かめてみてください。

第3コーナー「千利休とその後」。利休の家系や茶人系譜、また千家御用を務める千家十職をご紹介しながら、季節やテーマに合った展示をしていくガラスケースを設置しています。最後のシアターでは樂家第15代樂吉左衛門さんが利休や茶の湯について語ってくれます。

いろいろと試行錯誤しながら完成した千利休茶の湯館。みなさまが利休や堺のまちと出会い、少しでも興味を持っていただけたら幸いです。

(小松原)

▼「与謝野晶子記念館」ができるまで

堺市では、1961年に晶子20年祭として生家跡の歌碑建立をきっかけに、本格的な与謝野晶子

の顕彰活動がスタートしました。多くの堺市民や市民団体の方々をはじめ、全国の晶子ファンや研究者の思いが実を結び、このたび与謝野晶子記念館が開設したのです。

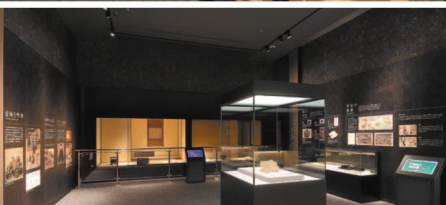
開設にあたり、これまで顕彰施設として活動してきた与謝野晶子文芸館でのさまざまな課題や要望をどう活かし、「新しい文学館」という印象を打ち出すかを検討してきました。

展示コンセプトは、晶子の魅力を通して堺への興味につなげ、市内周遊に誘うというものです。プロログで、晶子の生涯や詩歌の世界をご覧いただいた後、「晶子の表現世界」で作品を紹介し、「晶子の心の風景」では作品の背景を知っていたとき、最後に「晶子のふるさと堺」を紹介するといった3部構成となっています。

そして、今日にも通じる晶子の生き方・功績・メッセージなどを、晶子をあまり知らない方や若い世代の方にも興味を持てるような分かりやすい展示をめざしました。

例えば、モニターやタッチパネルといった機器の設置をはじめ、体感できる映像展示や引き出し展示、視覚的にわかりやすい「晶子の装幀」コーナーなどがそうです。また、晶子の声や動画が視聴でき、晶子をより身近に感じていただけます。このように、新しい展示手法や機器を導入し、幅広い層の方々にご満足いただけるよう工夫しました。

(森下)



7/28(火) 谷見氏 講演会
「近代数寄者と美術館」



▶野村美術館館長・谷見氏による講演会を開催しました。「数寄者（すきしゃ）」は茶の湯に執心する人物を指します。本講演においては、数寄という言葉の成り立ちから、明治時代以降の実

業家たちが当時の茶の湯界を牽引する近代数寄者となり、彼らが私設美術館を創立するまでの流れを分かりやすく紹介して頂きました。

8/22(土) 中村利則氏 講演会
「さかい待庵と無一庵」



▶京都造形芸術大学教授・中村利則氏に、茶室の歴史を紐解きながら、同氏の監修による「さかい待庵」及び「無一庵」という当施設内に整備された茶室に関してご講演頂きました。さかい

待庵に対する考え方や、茶室に施した意匠の理由など、監修者ならではの話に参加者も熱心に聞き入っていました。

10/4(日) 降矢哲男氏 講演会
「茶の湯と考古学」



▶企画展「まちを掘る」の関連講演会として、京都国立博物館研究員・降矢

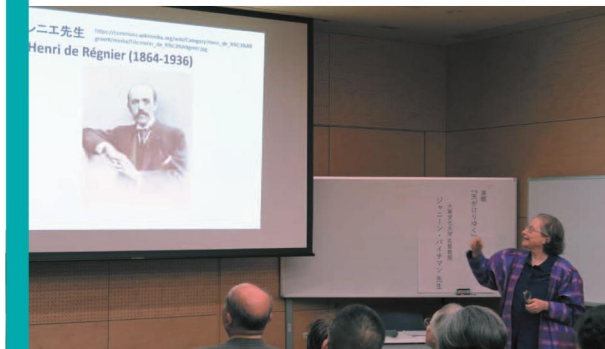
哲男氏にご講演いただきました。茶の湯の歴史について説明いただいたのち、堺をはじめ、一乗谷、博多等の出土例をご紹介いただきました。写真を多用しながらのお話で、参加した方々にも分かりやすかったと好評でした。

11/8(日) 上田博氏 講演会
「よさのひろしと詩人森鷗外
～『巴里より』『リラの花』101年」



▶企画展「与謝野晶子—その限りなき挑戦の生涯—」に関連して、立命館大学名誉教授・上田博氏による記念講演会を開催しました。2015年は、与謝野寛・晶子共著の紀行文集『巴里より』、与謝野寛の訳詩集『リラの花』の刊行から101年目の年にあたりました。寛が渡欧体験によって生み出した作品を辿りながら、渡欧前後で日本の状況が大きく変わったこと、寛の著作の刊行の時期が彼の評価にどのように影響し、また鷗外が寛をどのように手助けしていたのか、寛と鷗外の関係についてもお話いただきました。

11/22(日) ジャニーン・バイチマン氏 講演会
「『天がけりゆく』 晶子パリへ」



▶企画展「与謝野晶子—その限りなき挑戦の生涯—」に関連して、大東文化大学名誉教授のジャニーン・バイチマン氏による記念講演会を開催しました。与謝野寛・晶子共著の紀行文集『巴里より』に焦点をあて、夫妻の渡欧を中心に紹介していただきました。晶子の全生涯を背景に、その洋行前後の作品の詩歌と散文を紹介しながら、情熱詩人と言われる晶子と評論家晶子の関係に、現在の観点から、改めて光を当てていただきました。ご講演の中では「君死に給ふことなかれ」の英語訳の朗読もしていただき、お客様からは「語りに感動した」とのお声をいただきました。

〈関西茶の湯ミュージアムパネル展〉

平成27年6月19日(金)～8月30日(日)

関西にある茶の湯に関連する施設(美術館・博物館ほか、計31館)について、パネルで紹介する企画展を開催。施設概要に併せて、各館が所蔵する逸品も紹介しました。展示室内には各施設のリーフレットや展示案内などを置き、自由にお持ち帰りいただきました。

(伊住)



〈まちを掘る―発掘40年と茶道具逸品の数々〉 平成27年9月11日(金)～10月18日(日)

企画展示室において企画展「まちを掘る―発掘40年と茶道具逸品の数々」を開催しました。実物が並ぶ展示としては当館のトップバッターとなり、担当者は少し緊張しながら準備しました。

中近世の堺のまちは、国際都市として繁栄を遂げ、その中心にいた富裕な商人たちによって茶の湯文化が育まれました。当時のまちは、大坂夏の陣の前哨戦によって灰燼に帰しましたが、現在も地下に眠っており、堺環濠都市遺跡(略称SKT)として発掘調査が進んでいます。ちょうど昨年で調査開始以来40年を迎えました。その調査成果から、武野紹鷗、千利休などの優れた茶

休以後に比定されるものが多いのですが、桃山の香りが色濃く残っており、堺の黄金期を感じさせてくれます。

第1章は「まちを掘る―堺環濠都市遺跡の40年」というテーマで、初期から最新の調査地点を当施設の近隣から4カ所取り上げました。ここでは茶道具にこだわらず、生活雑貨や瓦・土壁等も展示していたため、アンケートにこんなものまで発掘されるとは驚いた、などのご意見もいただきました。

人を生んだ、堺の茶の湯文化の一端に触れられるような茶道具を中心にご紹介しました(展示した出土品は全て堺市文化財課保管)。茶道具は利

第2章は「堺の茶の湯―建物と茶道具」というテーマで、当時用いられた茶道具、それも建物跡から出土したものを中心に、調査地点ごとに紹介しました。堺環濠都市遺跡では、茶室と思われる建物跡や、蔵



でありながら炬燵を備えている蔵座敷の跡も確認されています。茶道具蔵として利用されたと考えられる磚列建物(磚と呼ばれる方形の瓦質のもの)で基礎を囲っている建物)の跡からは、しばしば茶道具がまとまって見つかっています。なかでも開口神社南側の調査地点からは、会所と思われる書院跡と茶道具蔵跡が見つかり、建物跡からコンテナ80箱分の遺物が出土しました。その中には海外から伝えられたものも多く、堺のまちの豊かさを示しています。

第3章は「堺の茶の湯―堺衆の心意気」というテーマで、調査地点にこだわらず、逸品と呼ぶにふさわしい茶道具を取り上げました。今回ポスターやチラシの写真に使用した韓国製茶碗(彫三嶋)は、独立ケースで備前水指・瀬戸美濃茶入と共に道具組の一例として展示しました(写真)。この茶碗は完形で出土しましたが、漆で継いだ跡があり、当時から大事にされていたことが分かります。また利休所持と伝わる「旅枕」(和泉市久保惣記念美術館蔵)とほぼ同形と思われる瀬戸花入(立鼓形)や、長次郎に始まる樂焼との関係も注目される軟質施釉陶器茶碗などを紹介しました。

現代に生きる私たちは中近世の堺のまちを見ることはできませんが、こういった出土品から、当時のまちの姿や、堺衆が好んだ茶の湯の風景を感じていただけたのではないかな、と思います。(小松原)





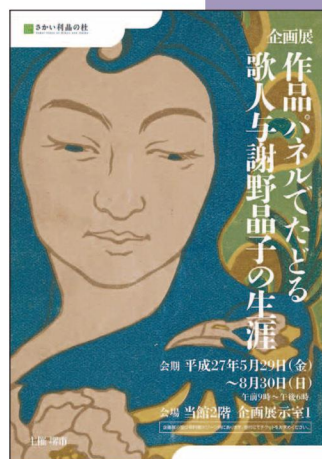
〈作品パネルでたどる歌人と謝野晶子の生涯〉
平成27年5月29日(金)~8月30日(日)

与謝野晶子の生涯を詩歌などの作品パネルでたどる企画展を開催。全国各地に点在する晶子関連の展示・研究施設も合わせて紹介しました。

(森下)

〈与謝野晶子—その限りなき挑戦の生涯—〉

平成27年10月30日(金)~12月13日(日)



本展は、晶子が常に新しい世界に挑戦し続けたその生き方と幅広い活動を、自筆資料や著書、遺品など、堺市博物館所蔵資料を中心に約90点を展示紹介するものでした。

副題に「限りなき挑戦の生涯」とありますように、晶子の生涯は、挑戦の連続でした。特に、夫・寛(鉄幹)を追って22歳で上京したこと、ヨーロッパへの海外旅行は、晶子にとって大きな挑戦といえます。そして、生涯に3万首以上の歌を作り、

社会評論や教育、「源氏物語」の現代語訳など、さまざまな分野へと活動の幅を広げ、女として、母として、一人の人間としても前向きに生き抜きました。

展示構成は、歌人、

評論家・教育者、古典研究者と、晶子の業績を3つに分けました。

また、新たに与謝野家から見つかった晶子の最晩年に詠まれた歌稿ノートも合わせて紹介しました。このノートには、亡くなる3ヶ月前の雑誌『冬栢』に発表した歌や、晶子の絶筆と思われる歌掛軸「連峯之雲」の歌も含まれ、その推敲の様子がうかがえます。そして、1940年に脳溢血で倒れ半身不随となり、寝たきりの生活を余儀なくされてい



た晶子の作歌への情熱が感じられます。

晶子は終生「自分の感激を歌いたい」と、歌という形式で自らの感情を表現し続けました。亡くなる数か月前まで歌い続けた晶子の歌への情熱は衰えることがなかったことが分かります。

本展では、晶子の力強い作品とその生き方を紹介し、多くの来館者にご満足いただきました。特に、最晩年のノートは、新聞の一面を飾り、時事通信や共同通信が全国に記事を配信したので、多くの方々に知っていただく機会となり、企画展のテーマである晶子の挑戦し続ける情熱を象徴する作品として展示することができました。

また、晶子だけでなく、千利休や堺観光を目的に来館されるお客様にも晶子の魅力を知っていただくことができました。特に、晶子の作品から抜粋した「言葉集」は、多くの

方がメモを取ったり、掲載している図録を購入されました。「心打たれる言葉が多く、今後の人生に活きる気がする」といった感想など、晶子の生き方を、来館者自身の生き方と結び付けてご覧いただけたことは大きな成果でした。

(森下)

さかい利晶の杜のフロアマップについて

渋谷 一成

はじめに

堺市立歴史文化にぎわいプラザ（さかい利晶の杜）の観光案内展示室床面には、堺の旧

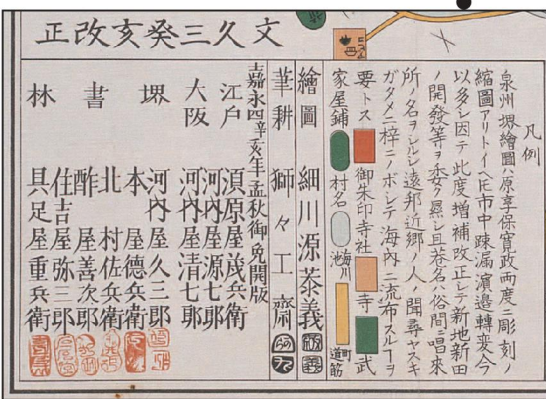


写真① 文久改正堺大絵図（堺市立中央図書館蔵）

市街を描いた幕末と明治の絵図を基にした、縦四・二メートル、横五・六メートルの陶板製のフロアマップが設置されています。観光案内展示室は、施設のいわば玄関口ということもあり、日々多くの方々にこのフロアマップをご覧いただいているところです。

しかし、スペースなどの都合もあり、展示室内にはフロアマップの解説板等を置くことができないため、ご来館の皆さんにはこれらの絵図に付随するさまざまな情報を提供できないのが残念なところです。

そこで、これらのフロアマップについて、基礎的なことから解説する資料があればと思い、本コラムを用意することになりました。



写真③文久改正堺大絵図の凡例部分

一 もとになった二つの絵図

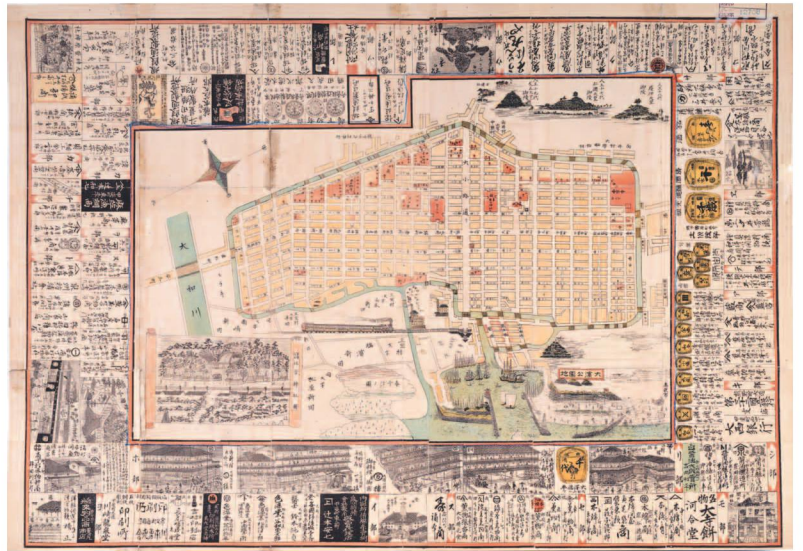
フロアマップは、大小二つの絵図からなり、大きな方は「泉州堺絵図」、小さい方は、「堺市全図」と表示しています。いずれも、江戸幕末期と明治期に印刷・刊行された絵図から、その主要部分を抜き出して表示したもので、それぞれもとなった資料が存在しています。

まず前者の「泉州堺絵図」は、「文久改正堺大絵図」の名で『堺市史』第三巻（一九三〇年刊、一九七七年復刻）に第八十一図版として収録されているものです。この絵図は、文久三（一八六三）年に刊行されたもので、写真①はほぼ同内容の堺市立中央図書館のものを掲げました。「泉州堺絵図」については、次節で詳述しますが、江戸時代の堺の町名がよくわかる点が大きな特徴であり、かつての堺の都市空間の様子を彷彿とさせるものです。

また、小さい方の絵図「堺市全図」は、明治



写真④ 堺港付近の様子（文久改正堺大絵図、部分）



二十四（一八九一）年に発行された「堺市全図及商工業独案内」(写真②)の絵図部分のみを抜き出したものです。周囲にはこの当時の堺の商工業者の名前と場所・商品などが記されており、この当時の堺の商工業の広がりをおうかがうことができます。明治十一年生まれの与謝野晶子も目にしていた景観で、明治二十一（一八八八）年に開通した阪堺鉄道（現、南海電気鉄道）と吾妻橋駅など、海浜部の様子も詳しく描かれていることが大きな特色です。

このように、フロアマップのもとになった絵図は、見ていて面白く、江戸と明治の堺の町について、情報量の多いものを採用しました。二つの絵図はいずれも、堺市立中央図書館のホームページ内にある、デジタルアーカイブで見ることができ、フロアマップとなる際に本図の範囲に入らなかった部分も含め、もともとの絵図の全体の様子を詳しくご紹介いただけます。

二 「泉州堺絵図」の景観について

大きな方の絵図「泉州堺絵図（文久改正堺大絵図）」の景観について、もう少し詳しくみておきましょう。

この絵図は、嘉永四（一八五二）年に作られた絵図を改正し、新たに出版しなおしたものです。改正が必要だった理由は、この絵図の凡例に端的に記されています（写真③）。

この部分には、次の二つのことが記されています。

（ア） 堺の絵図は過去に享保・寛政のころにも出されたが、市中については漏れが多く、海岸部については転変が激しい。

（イ） そこで、今回嘉永四年に刊行されたものを増補改正して、新地新田等を詳しく表示し、地名なども世間でよく知られているところを記して、人々の便宜に供する。

（ア）に言及される享保・寛政の二度の絵図は、吉田豊氏の論考「絵図で見る堺港」（『堺研究』三三号、平成二十三年）の整理により、その存在が確認されていますが、本図は出版された堺の町の絵図としては、三番目の系統に属するものといえるでしょう。

改正の理由として挙げられた「海岸部の転変」は、具体的には①お台場の築造、②堺港の北側の開削が考えられます。

お台場は、幕末期に江戸幕府が全国の海岸部を中心に築造したもので、堺港付近でも、港を挟んで南北に台場が築かれました（写真④）。

北台場は安政元（一八五四）年に築造が開始さ

れ、翌二年に完成をみています。

いっぽう南台場は、安政五（一八五八）年に築造が開始されたものの、文久三（一八六三）年の六月には、台場の形が一字型から枯梗型（稜堡式）に変更（彦根藩の築造担当時）され、最終的には 慶応二（一八六六）年に完成しています。南台場は明治以降に大浜公園となり、現在も公園内にその遺構が比較的良好状態で残存しています。「泉州堺絵図」では、南台場が枯梗型（稜堡式）に変更される前の姿で描かれること、短期間しか存在しなかった北台場の様子を詳しく示していることなど、台場の築造について貴重な情報が読み取れます。

堺港の北側の開削についても、安政元～五年にかけて開削がすすんだことが明らかになっており、それまで半円形であった堺港が、現在の形になったのがちょうどこの時期です。

北波戸の部分に記された「水天宮」や「天神御旅」・「新住吉」などは、その敷地に石碑が残っていることもあり、このころに整った景観のなごりを今に感じることができます。

おわりに

以上のように、さかい利晶の杜のフロアマップについて、そこから読み取れる事柄をやや詳しくみてみました。フロアマップでは、スペースの都合で割愛してしまった部分もありますが、絵図の読み解きを通じて、あらためて堺の町の歴史が持つ魅力にご注目いただければ幸いです。



椿をば幸ひの木と仰ぎたり
おなじこころの童と大人

学芸話
茶

椿を詠んだ
晶子の歌

(歌集『心の遠景』所収)

大人と子どもが、椿の木を見上げている様子を詠んだ歌です。二人は親子でしょうか。椿を「幸ひの木」と考えているようです。歌集『心の遠景』の刊行年は昭和3年、晶子50歳のとき。12人いた子どもの中のいちばん上の子は26歳、末の子は9歳、1歳の初孫もいた頃ですから、孫と子どもを親子を詠んでいるのかもしれないね。家族の和やかなひとときを感じられる歌のように思います。
(安達)

…………… 編集後記 ……………

開館以来、大勢のお客様にご来館いただき喜びの多い一年となりました。この間に頂戴した数々のご意見を胸に職員一同、さらに努力してまいる所存です。「さかい利晶の杜学芸だより」も随時発行する予定です。どうぞお楽しみに！
(伊住)

ご利用案内

- 休館日** ●千利休茶の湯館、与謝野晶子記念館、茶の湯体験施設 第3火曜日(祝日の場合は翌日)及び年末年始
●観光案内展示室 年末年始
●駐車場 年中無休
- 開館時間** ●千利休茶の湯館、与謝野晶子記念館、観光案内展示室 午前9時～午後6時(最終入館 午後5時30分)
●茶の湯体験施設 午前10時～午後5時(最終入席 午後4時45分)
●駐車場 24時間
- 駐車場** ●普通車 1時間200円(1日最大1400円) ※さかい利晶の杜施設利用者に割引があります。
●バス 1回1,000円【予約制】



交通アクセス

- 阪堺線 宿院駅より徒歩で1分
- 南海高野線 堺東駅よりバスで約6分(宿院バス停下車)
- 南海本線 堺駅より徒歩で約10分 バスで約3～5分(宿院バス停下車)
- JR阪和線/南海高野線 三国ヶ丘駅よりバスで約10分(宿院バス停下車)
- 阪神高速15号堺線 堺ICより車で約3分
- 阪神高速4号湾岸線 大浜ICより車で約3分

利用料金

区分	大人(大学生含む)	高校生	中学生以下
観光案内展示室	無料	無料	無料
千利休茶の湯館・ 与謝野晶子記念館 ※1 (2館ともご覧いただけます)	300円	200円	100円
立礼呈茶(抹茶と和菓子)	500円	400円	300円
茶室お点前体験【予約制】	500円	400円	300円
さかい待庵特別観覧セット【申込制】 (展示観覧・立礼呈茶含む)	1,000円	800円	500円

※1 常設展観覧料は障がいのある方と介護者、堺市内在学の小中学生と引率教職員、未就学児は無料

問合せ先 さかい利晶の杜 〒590-0958 堺市堺区宿院町西2丁1-1 TEL.072-260-4386 FAX.072-260-4725 <http://www.sakai-rishonomori.com>